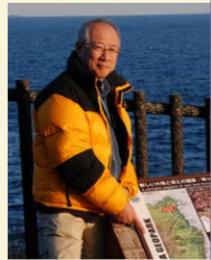


2007  
2008  
2009  
2010  
2011  
2012  
2013  
2014  
2015  
2016  
2017  
2018  
2019

なかがわ かずゆき  
中川 和之  
Kazuyuki Nakagawa

# 覚悟をもって この豊かな地に 暮らすために



昭和の頃から科学記者として地震・火山の災害や研究取材していた私が、大地の営みの厳しさを強く実感したのは、郷里を襲った1995年の兵庫県南部地震だった。地震学会員になってはいたが、ボーイスカウト活動のハイキングやキャンプで親しんだ六甲山が、過去の地震の繰り返しで高くなつた山で、今後も地震を繰り返す可能性があることには無知だった。一方で六甲山は、瀬戸内海との

間に住まいや産業に向けた土地作り、断層と花崗岩が磨いた水は「赤道を越えても腐らない水」として、神戸港を世界で有数の港にした。そこに暮らした外国人たちによって、山のレジャーや日本初のゴルフ場ができた。断層崖の上にある公園からは、神戸の街並みが「1000万ドルの夜景」となり、恋人のメッカになっている。地震の繰り返しによる恵みを、人は活かしてきたのだ。

## GGNガイドラインに なかった「防災」

この地震以降、日本地震学会が日本火山学会と共に始めた事業の一つが「地震火山子どもサマースクール」(現在では日本地質学会も参画)で、私も参加した。

この行事のポリシーは「災害と不可分の関係にある自然の大きな恵みを、地元子どもたちと楽しく学ぶ」こと。夏休みの1泊ジオワークキャンプというイメージだ。1999年からほぼ毎年、各



伊豆大島の川島町長に隠岐の大会で集めた土砂災害義援金を渡す



2011年8月、認定審査直前の磐梯山で

地で開催してきたが、うち14回がジオパーク地域での開催。私は最前まで運営の事務局長役を務めてきた。

2008年、地震学会にジオパーク委員会(JGC)委員への推薦依頼があった。当時のGGNガイドラインには防災教育の概念がなく、利活用だけが促進されることへの懸念が示された。「この活動は、恵みと災いの双方を学ぶ地震火山子どもサマースクールの目的と共通しており、防災の理念を明確にするために、運動に参画し



2012年、糸魚川では河原の石を東西に分けてみる実験

て主張すべき」と強く訴え、当時の地震学会長から委員に指名され、審査に関わることになった。

## 審査を通じて 地域の本気度を「実感」

JGCは、当時は京大総長だった尾池和夫委員長を始め重鎮ばかりだったが、第1回のJGCで世界ジオパークのガイドラインに防災の概念がないことを指摘したと

ころ、次々に他の委員からも同趣旨の発言が続いた。その場で決めた募集案内に、防災教育的な活動も評価することを明記した。「変動帯のジオパークを評価できる項目・観測の採用を今後本委員会として世界ジオパークネットワークに働きかける」とまで宣言した。その直後の第3回ジオパーク国際ユネスコ会議で、JGC事務局として産総研の渡辺真人氏が参加

し、防災教育の重要性などを訴え、大会宣言に「ジオハザード」の言葉が入ったのだ。その後、10年にわたってJGCの審査に関わってきた。各地での審査やGGNから審査のあり方を学んでいくなかで、覚悟を持ってジオパークに取り組む多くの人たちを知り、価値が分かち合える大勢の仲間もできた。ジオパークの地域でサマースクールを実施し、子どもたちと大地の恐れと恵みを楽しんできた。行っていないジオパークはあと3カ所だ。

一方でまだまだ課題も多く、共にみんなで悩み続けていかねばならないことは多い。そして、ジオパークで得た手法を外にも広げたい。六甲山がジオパークになるのは難しいだろうが、最高峰を展望する峠に「この先、五助橋断層へ下る」という看板を立て、六甲山の成り立ちを多くの人に共有したいのが、私の夢なのだから。

(時事通信社解説委員)



2013年は伊豆半島下田。小山静大教授が現地解説



2015年は南アルプススーパー林道で早大高木教授が解説



2018年3月、最後のJGCを終えて